

昭和36年度
(1961)
第1回大会

男子優勝 札幌南 女子優勝 札幌静修

【 専門委員 寸評 】

男子団体戦の決勝は札幌南と札幌北の対戦になった。ダブルスは、中学時代から軟式庭球でペアを組んでいた札幌北の高橋・山崎組が、1年生ながら、2年生の松原組を破る殊勲の勝利だったが、シングルスで2勝した南高が優勝し、全国大会への出場権を得る。

女子団体は、4校のリーグ戦を制した静修高校が優勝して、全国大会への出場権を得る。女子は、総じてフットワークの悪さが目立ち、一部の選手を除くとファイトに欠け、今後この面について、平素の練習が必要だと思う。

日程の都合で個人戦は全部1セットマッチとなってしまった。そのため実力を出し切れなかった選手もあったようで、残念であった。

初めての大会だったが、運営当番校の先生方のご努力で、無事成功裏に終えることが出来たことを、厚く御礼申し上げたい。

全国大会では、運悪く、すべて関西の一流校との対戦となってしまったわけだが、試合経験の不足と、特にダブルスのレベルの低い点が目立った。

(専門委員長 相原 嘉正)

優勝のよろこび

男子 札幌南高等学校

“優勝”このたった2字が意味する事実をいつでも誰でもが勝ち得る事を願い、そしてそれに向かって努力している。その優勝という事実を硬式庭球としては初めての高体連主催の全道高校庭球大会に、しかも全国大会という、我々最大の目的に、直接つながっている有意義な大会において、我々は自分達のものにする事ができたのだ。

冬でも欠かさず続けてきた最低50回の素振り、試合に於けるスタミナを養うため1キロ～4キロのランニングを毎日の練習に含めて規則正しく行った事が、2日間で(団体戦、個人戦を合わせて)、多い者は、11試合も消化する事ができた体力を養い、全道制覇を目指して全員が、1戦1戦を慎重に勝ち抜いてきた勝負強さが、勝利へ導いてくれたのだろう。

うれしさに、何かはしゃぎたい気持ちを照れ隠し、ただ笑っていても、互いの顔が目映れば、どこからともなくこみあげてくるあの喜びが、無意識のうちに短い言葉となって表れてくる。そんな優勝決定の瞬間を今でも忘れていない。

北海道にしては暑かった7月の初旬、すでに薄暗くなったコートで、選手も応援にかけた部員も一緒になってこの優勝を心から喜びあったのだ。

これらはみなテニスに対する熱意と根性すなわち努力と忍耐からなる総合的な実力であると信じたい。

試合が終わって優勝カップや賞状授与の瞬間、顧問教官や校長先生を囲んで記念撮影は、優勝できたからこそ、感激せずにはいられなかったのではないだろうか。我が南校硬式庭球部発展の歴史に、意義ある1ページを記す事ができた。全道制覇のこの感激を忘れず、これからも大いに頑張りたい。

(南高 島野 秀孝記)

優勝のよろこび

女子 札幌静修高等学校

今年初めて高体連種目に硬式庭球が入り、第1回目で我が静修高校が優勝したことは、われわれ一同感激たえません。

私達の学校に硬式庭球クラブができてから約8年、この間先輩達が本当に苦労して築きあげたこのクラブも高体連に出場できるまでに盛んになったことを知ったら喜んでくれると思います。

私達の団体優勝が決まった時、北海道少年少女選手権大会での優勝より以上のうれしさが、わきあがってきました。なんとといっても南校との決勝で、2-1で優勝がきまった時は胸がいっぱいになり、南校との試合が大事な試合であっただけに、喜びもひとしおでした。仲間の中でも感激の涙を流して居る様子が、あちこちで見受けられました。第1回の優勝校と思うと前にも述べたように、うれしい、これしか言い表すことが出来ません。

これを機会に、北海道の硬式庭球が、もっと、もっと盛んになってもらいたいものです。私達が試合を行うたびに思う事はこのことです。

私達も第2回からはより以上の実力を発揮して、またこの喜びを再び味わえることができるよう、北海道のためにも、これからできる、他の庭球クラブのためにも、クラブのみんなが、一つになって、この喜びをわかちあいたいと思います。

これからの北海道庭球界がより以上に発展することを、われらクラブ員は願ってやみません。

全国の大会ですばらしい成績を残すためにも、第2回から沢山の出場校が出るよう願っています。